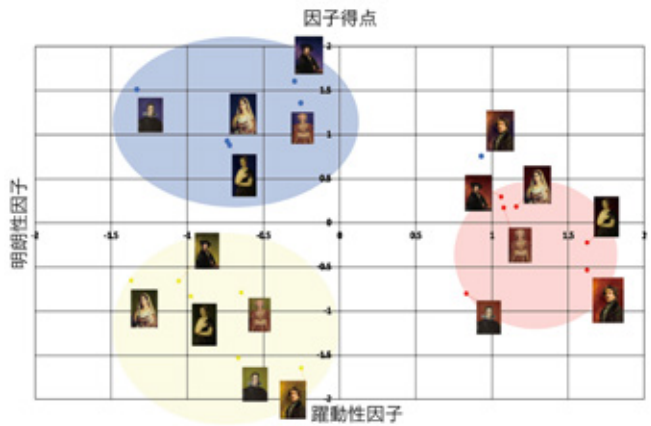
土屋友里

「背景色の効果 ～肖像画の背景色は、描かれる人物の印象形成にどのような影響を与えるか～」

論文



（要旨）

本研究では、肖像画の背景色を赤・青・黄それぞれに変えることで、肖像画から受ける印象が色ごとに変化するのか、SD法を用いて被験者へ評定させ、明らかにすることを目的とした。肖像画の背景が、描かれたモデルの表情への印象形成にどのような影響があるのか研究するために、以下の仮説を立てた。

肖像画に描かれる人物の背景色は、鑑賞者が人物の表情に対して受ける印象に影響する。赤の背景色は怒りなどといった動的な感情を与え、青の背景色は悲しみといった静的な感情を与えるのではないだろうか。それは時として、鑑賞者に、描かれたモデル自体の性格性についても推測させることができると予想される。

実験では、背景色を変えた際の表情の印象を評価するため、笑顔、怒り、悲しみなど表情がわかりやすい作品は避け、作者がそれぞれ異なる男性の肖像画3作品、女性の肖像画3作品、計6作品を選び、背景を赤、青、黄に加工した。評定用語をそれぞれ変えた肖像画を載せた画像をランダムに提示し、SD法を用いて印象評価実験を行った。

実験から得られたデータを因子分析した結果、赤は激しいイメージを持たれるのに対し、青は穏やかな印象を与えた。黄はレンブラント、ドラクロワの刺激に関して、多少ばらつきはあったが、穏やかな印象をもたれやすいという結果になった。

実験結果から、肖像画は背景色により、鑑賞者がモデルの表情から受ける印象を、考えようによっては操作することができるとわかった。自画像の場合は自分自身を、制作を依頼された場合はモデル自身を、威厳をもたせ、または美しく、あるいは柔らかい印象をもたせるなど、表情を描くことに加え、背景色が表情へ与える印象を考慮する必要性もあると考えられる。

人々は描かれたモデル単体で絵を鑑賞するのではなく、背景情報など様々な要素を取り入れ、描かれた人物の性格、思想、感情などを想像して鑑賞していると考察した。

小野寺 彬

「18世紀における「デジタル」幸福論と視覚文化 ―ハッチソン、ベンサム、百科全書、オートマタ―」

論文

図1

$$M = (B + S) \times A; \text{ and } \therefore \text{ ereforeBA} = M - SA, \text{ and } \frac{B = M - I.}{A} \text{ Int} \therefore \text{ elattercase,}$$

$$M = (B - S) \times A; \therefore \text{ ereforeBA} = M + SA, \text{ and } \frac{B = M + I.}{A}$$

図2

（要旨）

本論文では、数値による幸福論が、18世紀の視覚文化と関係があるという仮説を明らかにするそのために、18世紀の「デジタル」の時代を例に挙げながら論じていくことを目的とする。

あらゆるものが「デジタル」化されている現代において、「デジタル」の意味の他の一端を知っている人は少ないように思われる。標準的な英和辞典でその意味を引いてみれば、第一に書かれている意味は「指の」、次に「指を使って・指による」そして三番目でようやく「数字を使う」と出てくる。つまり「指」、それで指し示されたもの、それこそが「デジタル」である。「指」で指し示されたものは18世紀のヨーロッパにおいても多々あり、すでにその時代から「デジタル」化はある意味でされていたかのように思われる。

まず、18世紀のヨーロッパにおいて「数値」による「デジタル」化はフランシス・ハッチソン（1694～1746）の道徳的算術を用いて幸福論に表れる（図1）。ディドロとダランベールの「百科全書」の図版に「指示」する袖付きのインデックス・フィンガーとして表れる（図2）。また、ジャック・ド・ヴォーカンソン（1709～1782）の絡繰人形には「指」による絡繰りのスイッチのひとひねりやそれによる人形の指の一連のアクションの結果生じる効果がうかがえる。したがって、18世紀から指と数による「デジタル」の時代が到来し、その思潮の中で幸福の数値化が生まれたであろうと推測される。

（図2出典）
The Violence of the Letter: Instruments of the Hand p.72 Fig2 Guilantonio Hercilani,Essemplare Utile, fol. 2. By courtesy of the John M. Wing Foundation, the Dewberry Library, Chicago, I ll.

神田美寿々　「官奴仮面物語」

アニメーション／映像 6分16秒

韓国の江陵市で催される伝統的な大祭「江陵端午祭」で演じられる仮面劇「官奴仮面劇」は、官民が一体となり、僻邪と豊饒を願って継承してきた民俗芸能です。実際に現地に赴き、祭と劇を取材してアニメーション作品を制作しました。

遠藤優・越野朋美・ 椙崎敦美・中井美乃莉・ 中尾幸那「CONVERGENCE 海外芸術研修の記録 2017-2018」

冊子／ B5版72ページ

芸術文化専攻では2年次に1か月の欧州研修に参加し、3年次にその成果を学生自身が記録集としてまとめます。2018年度は5人の学生が、イギリス・ラフバラ大学での研修や、ロンドンやノッティンガムを見学した体験を日本語と英語で綴り、編集しました。